

レクリエーション活動におけるエコロベースの検討
障害者エコロベース大会の追跡調査

高橋 仁美 (同志社大学)

来田 宣幸 (京都大学大学院)

西山 龍之 (京都市障害者スポーツセンター)

清水 潔 (日本エコロベース協会)

知的障害者を取り巻く環境において、運動不足による肥満が課題として挙げられる。知的障害者には運動が苦手な者が多く、筋力トレーニングやフィットネスエクササイズ、あるいは、チームスポーツやルールが複雑な種目を継続的に実施することは困難であった。しかし、京都市障害者センターでは「エコロベース」を運動プログラムに取り入れ、5年間にわたり継続してきた。その結果、これまで困難であるとされてきた知的障害者によるチームスポーツが定着し、運動量も確保されるようになった。エコロベースは、ベースボール型のニュースポーツであり、ルール理解が容易であり、知的障害者向けにルール変更することが可能であった。また、使用する道具が安全に配慮されていた。そこで、本研究では、京都市障害者センターにおける5年間の運動プログラム実践を追跡調査することによって、知的障害者の運動継続にかかわる要因について明らかとすることを目的とした。文献およびインタビューに基づいて、障害者がエコロベースを通じて連帯感や友好を深めながら、スポーツ参加の拡大と技術向上の過程を明らかとすることを目的とした。

レジャー志向性尺度の開発に関する研究

○佐橋 由美 (大阪樟蔭女子大学人間科学部)

多留 里香 (大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科)

Key words: れじゃーにおける志向性、レジャー参加のスタイル、レジャーの質、well-being

レジャー活動は個人のエネルギー投入あるいは自我関与の強さによって大きく、カジュアルレジャー、シリアスレジャーの2タイプに分けられよう。これまでの研究は、このうちシリアスレジャーの参加が個人のwell-being向上に直接的に寄与することを示唆している。本研究は、どのタイプのレジャー活動への動機づけが強いのかを探る志向性尺度を作成して、この志向性が実際にどのタイプのレジャー活動参加に繋がり、ひいてはレジャーの質、生活全般の満足度にどう影響するのか、量・質両面への影響を検討するものである。

28項目からなる志向性尺度(4件法)とともに参加状況を把握する52項目のレジャー行動目録、レジャーの質を測定するための退屈感尺度(LBS)やレジャー内発的動機づけ尺度(ILM)、さらに全般的なwell-beingを測定する尺度からなる質問紙を、女子大学生に授業時間内に実施した。レジャー志向性尺度の検討にあたっては、志向性28項目に対して因子分析を行い(N=102)、①長期的展望-向上 ②活動性 ③主導性 ④対人関係志向 ⑤自然志向の5因子を抽出し、レジャー志向性は5つの観点から把握されることを確認した。また、相関分析によりこれら各観点における傾向性がレジャー参加のスタイル、レジャーの質、全般的なwell-beingに及ぼす影響を検討したところ、5因子のうち特に①~③因子の影響度が高いことがわかった。即座の楽しみを抑えても長期的な展望に立ち自己の向上に励む志向をもち、身体的・社会的な意味で活動的で、他人に追従するのではなく、自ら率先して計画・行動する個人は、どちらかといえばシリアスレジャーに分類されるであろう活動への参加度が高く、レジャーの質も高く、全般的なwell-beingレベルも高かった。